

Title	姚文元の文学理論
Author	片山, 智行
Citation	人文研究. 25 卷 3 号, p.314-331.
Issue Date	1973
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

姚文元の文学理論

片 山 智 行

1

姚文元が一躍有名になったのは、1965年11月に発表された『新編歴史劇「海瑞罷官」を評す』によってであるが、それまでにも、彼はおびただしい量の評論や随筆を書いている。⁽¹⁾ もともと彼は上海ジャーナリズム界で活躍した文芸評論家で、『文滙報』や『上海文学』に評論を発表したり、また上海の『解放日報』の主筆をしていたともいわれている。『新編歴史劇「海瑞罷官」を評す』もまず上海の『文滙報』に発表され、それから始めて『人民日報』など中央の新聞雑誌に転載されたのであった。彼は1952年頃から文学界に登場しているが、もし彼が1930年の生まれとするならば、22、3歳ですでに評論活動を始めていたということになるだろう。しかし、彼の本格的な活動は1955年の胡風批判、そして反右派闘争の頃から始まったというべきで、それ以来彼の文筆活動は休むことなく今日まで引き続いているのである。

さて、この小論の目的は、彼の評論がいかなる特質を持ち、中国の新しい文学にどのように関わっているかを検討することであるが、まず文化大革命の号砲となった『新編歴史劇「海瑞罷官」を評す』や、文革のその後の進展に大きな影響を与えた『三家村を評す——「燕山夜話」と「三家村札記」の反動的本質』（1966.5）『反革命両面派周揚を評す』（1967.1）『陶鑄の二冊の本を評す』（1967.9）などから見てゆきたい。

『新編歴史劇「海瑞罷官」を評す』は姚文元の名で発表されてはいるものの、この評論を書くについては江青らとの準備があり、かつまた毛沢東が三回も手を入れたといわれている。すなわち、これは単なる文芸評論ではなく、呉晗批判を通じて、毛沢東路線に反対する実権派に宣戦布告したきわめて政治的な文章なのである。したがって、必ずしも姚文元のオリジナルな文章とはいえないであろう。また、1968年8月に彼の名で発表され

た「労働者階級はすべてを指導しなければならない」にしても、毛沢東の指示を記述したものであって、「毛主席の、闘争・批判・改革を立派にやりぬくための最新指示を伝えるとともに、それを深く突っ込んで解明している」ということになる。^[2]

恐らく、文化大革命の期間に書かれた彼の論文は、なんらかの形で、毛沢東、江青、その他文革指導者の意見が取り込まれているであろうが、しかし、そうであるにしても、彼の書いたものが彼のそれ以前の文章と決して無縁ではなく、そこにこそ姚文元の人並み秀れたマルクス主義文芸評論家としての本領があるといえる。

文革中に彼の名で発表された評論の特徴は、ほとんどが反毛沢東路線を歩む実権派への批判であって、しかもこれが「断罪」といった形で行なわれていることである。つまり、それは反論や論争を許す性質のものではない。このことは、彼の文章がきわめて政治的かつ実際的な性格を持っており、ただ言葉のうえで問題をあげつらうことでは終らない内容を含んでいることを示している。かつまた、それゆえに結論の方が前面に出てきていて、必ずしも言葉のうえからだけでその主張のすべてが納得できるといった文章でもない。^[3]

たとえば、「新編歴史劇「海瑞罷官」を評す」における批判の論点は、もちろん海瑞を「清官」として宣揚する誤りを指摘することではあるが、むしろ政治的には呉晗が「翻案風」を吹かせたということに狙いがあるのであり、政治的意図を持つこの文章は、そこにこそ重点が置かれていると見るべきであろう。とするならば、この問題は1959年の廬山会議での彭徳懐の国防部長解任事件にさかのぼらなければならないし、それ以後の情勢をも勘案しなければならない。つまり、彭徳懐解任に対する異議申し立てこそ呉晗の意図であった、と姚文元は摘発しているのである。

また「三家村を評す」にしても、「三家村」グループがソ連修正主義を学ぶように主張し、「党の社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社にあくどい攻撃を加え、現代修正主義を美しく飾りたて、右翼日和見分子が再び権力の座に戻るように世論をつくり出そうとした」と決めつけている。たしかに、姚文元が指摘するように、鄧拓の「「雑家」歓迎」においては、右翼日和見主義的な発想が見られる。すなわち、彼が雑家の持つ該博な知識の、「指導工作」に対する重要な意義を認めなければならない、と主張していることがそれで、姚文元によると、この「雑家」というのは、「十分に改造

されていないブルジョア分子，地主階級分子と，これらの階級の知識分子であり，ひと握りの政治的な素性のはっきりしない人物であり，地主とブルジョア階級の〈学者〉連中といった反動的人物である」ということになる。その他，「三家村」グループの筆になるものには，「自力更生」路線にケチをつけたものとか，アメリカ帝国主義に断固反対する中国を「好戦的」「覇権主義」と諷刺したものがある。しかし，そうした文章はその背後にある政治的意図や政治的情勢を明確に把握できる人間でないと，それだけで「断罪」することには抵抗を覚えざるをえないものである。しかし，いずれにしても，呉晗を含む「三家村」グループの文章には，『海瑞罷官』の場合と同じように，必ずしも十分に思想改造していない知識分子が「翻案風」を支持してものをいっているといった傾向があったことは，まず間違いない。姚文元はその「翻案風」に真っ向から対決する立場で評論を書き，彭真，劉少奇，及び周揚，陸定一といった実権派の本陣を陥れる橋頭堡を築いたのであった。

『反革命両面派周揚を評す』も，すでに論争の余地のない結論の出た「断罪」の文章である。姚文元はいう。

周揚是一個典型的反革命両面派。他一貫用両面派手段隱藏自己的反革命政治面目，竄改歷史，蒙混過關，打着紅旗反紅旗，進行了各種罪惡活動。

姚文元はこの評論のなかで，これまでの思想戦線における大闘争を四つ挙げ，それぞれにおける周揚の行為を検討して，彼の「赤旗をかかげて赤旗に反対する」両面性を暴露している。それは，1951年の映画『武訓伝』批判，1954年の『「紅樓夢」研究』批判，1954年から1955年にかけての胡風批判，それに1957年の反右派闘争である。だが，姚文元によれば，周揚は四回にわたる大闘争で逃げのびてきたが，五回目の大闘争でついにその反革命修正主義の正体が徹底的に暴露されたということになるのである。

周揚にはたしかに問題があったということが出来るであろう。その一つは『魯迅全集』の注釈問題である。これは彼の地位を利用した卑劣な行為だといわれても仕方がないものであろう。⁽⁴⁾

しかし，上記の『武訓伝』批判から反右派闘争にいたる四つの闘争においては，むしろ周揚は指導的地位にいたのであって，くりかえしマルクス主義文芸理論に即して反マルクス主義的言動を批判している。したがって，言葉のうえからではほとんど彼の反党，反毛の行為を見出すことはできな

い。ただ周揚は全国文学芸術界連合会副主席，作家協会副主席，国务院文化部副部长，党の中央宣传部副部长といった要職にあることによって，そのときどきにいろいろなことをいっており，つぎのような発言をしたこともあるようである。「われわれはソ連に学ぶだけでなく，資本主義国の進歩的な芸術にも学ばなければならない。……たとえば『キューリー夫人』は大変すぐれた映画で，思想性も芸術性も非常に高い。これは十数年まえのアメリカ映画で，共産主義を正面から宣伝していないが，まさに共産主義の世界観であり，キューリー夫人の世界観とわれわれ共産主義者の世界観は一致している。……」

これは1956年のソ連共産党「二十回大会」直後に，ある文芸座談会で周揚がいった言葉らしいが，彼のその他の発言と照らし合わせてみると，それほど悪意を秘めた内容を蔵しているとも思われぬ。したがって，この部分を特に取り上げて問題にするのはいささか酷というべきであろう。

もっとも，この部分についての姚文元の批判は，いかにも彼らしいもので，つねに階級闘争ということをおぼろげに彼の鋭い目がひかっている。こうした批判に彼の本領が表われているので，少しこの問題を眺めてみよう。すなわち，彼はいう，「これは〈平和的転化〉の計画書である。『キューリー夫人』はアメリカのルーズベルトが権力の座にあったときにつくられた反動映画である。これはキューリー夫人の生涯を通じて，ブルジョア人道主義，平和主義，個人的奮闘，出世主義，階級協調の反動的視点を集中的に宣揚しており，科学者の活動は超階級的，超政治的なものであって，〈全人類〉に奉仕するものである，ということをおぼろげに宣伝し，事実上は独占ブルジョア階級の高利潤搾取のために奉仕しているのである。アメリカの独占ブルジョア階級がこうした〈伝記映画〉をつくったのも，比較的めだたぬ形で，ブルジョア階級に化粧をほどこし，アメリカの労働人民に〈影響〉を与え，彼らを腐蝕し，階級闘争の道を放棄して資本主義社会の上層部にのし上がれるような幻想を与えるためであって，その意図はきわめて悪辣なものである。」

また，これと同じような周揚に対する批判に，ホイットマンの評価に関するものがある。周揚は1955年11月，「『草の葉』と『ドン・キホーテ』を記念する」と題する文章を書いて，「彼（ホイットマン——注筆者）の詩を読むと，人びとはそこにホイットマン式の人間，新しい型の人間，身体が健康で，心がひろくて，崇高な理想，労働と創造の手，それに永遠の楽観

を持った人間を見ることができよう」と述べているが、それに対して、姚文元はつきのごとく批判している。つまり、周揚は「労働と創造の手」という人を惑わす言葉で、ホイットマンが労働人民をほめたたえているようにいっているが、「草の葉」がたたえているのはアメリカのブルジョア階級の化身に過ぎない。毛沢東同志が右翼日和見主義を断固批判した「農業協同化の問題について」の報告をすでに発表し、中国の農村が偉大な社会主義の高まりのなかにあるときに、周揚は反動的な、虚偽に満ちたブルジョア階級の「民主主義と自由」を「崇高な理想」ともち上げ、「アメリカのブルジョア階級の典型」を「新しい型の人間」といい、「輝かしい手本」とした、というわけである。

文化遺産をどのように継承していくかという問題は「文芸講話」で述べられており、われわれもすでに触れたことがあるので、⁽⁴⁾ここでは深入りしないことにするが、「文芸講話」のなかに反歴史主義的な傾向があると見る見解もあって、⁽⁵⁾にわかにはこの問題の結論を出すことはできない。しかし、姚文元の立場は、あくまで「文芸講話」の「過去の文学芸術の遺産は〈源〉でなくして〈流れ〉である」という見解を堅持したものであり、「源」を軽視して「流れ」（いまの場合、「キューリー夫人」やホイットマンの詩などのブルジョア階級の文学芸術）をもてはやす傾向には真向から反対しているのである。彼はこの点においてははじめから一貫して、これこそ彼の評論の特質といえることができるであろう。

さて、以上のような周揚の発言についての批判は批判としても、周揚は全般的には、党の文化政策の責任者として大量に指導的論文を書いたり、集会で発言したりしているものであり、表面的には、そして言葉のうえでは、毛沢東路線を絶対的に支持する立場にあった。そうでなければ、長年党中央の文化面の中樞に居つづけることはできなかったであろう。したがって、問題なのは、周揚の資本主義の道を歩む「実権派」としての存在そのものである。恐らく、党の文化面での責任者であった周揚は、文章を新聞雑誌に掲載したりポツにしたりする権限を大幅に握っていたことであろうし、そうした実務的な処理を通じて、彼が修正主義の温床をつくり出したり、「実権派」と呼ばれるにいたった人脈をつくり出していたことは想像される。（その一例が「魯迅全集」注釈問題である。）毛沢東が1964年6月に発した言葉が決定的にそのことを示している。少くとも毛沢東の目には周揚らの行動が反党的、反マルクス主義的、反革命的に映ったに違いない

い。姚文元の一連の文革期における批判も、つぎの毛沢東の言葉を踏まえて行なわれているのである。毛沢東は周揚と彼の支配している全国文連及びその支部を批判している。

这些協會和他們所掌握的刊物的大多数(據說有少数幾個好的),十五年来,基本上(不是一切人)不執行党的政策,做官当老爺,不去接近工農兵,不去反映社会主義的革命和建設。最近幾年,竟然跌倒了修正主義的边緣。如不認真改造,勢必在将来的某一天,要变成像匈牙利裴多菲俱樂部那樣的团体。

これを見ると、毛沢東が解放以来の文学芸術にあまり満足していなかったことがわかる。周揚らは言葉のうえではたしかに「文芸講話」を出発点とする毛沢東の文芸路線を堅持していたのであるが、毛沢東から見ると、実際面では必ずしも毛沢東の指示指導を受け入れていなかったということになる。これは江青が京劇改革に乗り出したのに対して、彼らが抵抗したことからも幾分窺えるものである。彼らは解放後十年近く経った段階においても、なお梅蘭芳の演ずる「貴妃醉酒」に満足し、新しい社会主義芸術の創作を志して京劇を改革しようとした江青らの動きには、きわめて冷淡であった。

毛沢東がこのまま看過することができないと特に感じるにいたったのは、「ここ数年」のことである。彼は「ここ数年は、なんと修正主義すれすれのところまで転落してしまった」といっているのであるが、この言葉が発せられたのは1964年のことである。したがって、修正主義的傾向が彼の目に余るようになったのは、1960年前後からということになろう。とすると、やはり1959年の彭徳懐の国防部長解任事件と、それ以後の動きが問題になってくるであろう。

彭徳懐は朝鮮戦争の経験から、⁽⁷⁾ソ連を見習って軍を「正規化、近代化」しようとし、それが「唯武器論」として退けられたのであるが、その他にも「人民公社」「大躍進」の政策に反対で、廬山会議では毛沢東と対立したといわれている。結局のところ、毛沢東路線が勝利して、彼は失脚したのであるが、必ずしも問題がすっきり解決されていなかったことは、のちの「翻案風」から逆に理解されるのである。とり分け、彼の背後に劉少奇らがいたことは問題の解決を困難にし、文革まで解決が持ち越されることになったといえる。

「翻案風」はもちろん彭徳懐の解任事件が中心になっているが、これが

ひとつの山を迎えるのは、1962年1月の中央工作拡大会議（七千人大会）で、劉少奇らが彭徳懷の処分は行き過ぎだと言明した時点であろう。また、その直前の1961年11月には、暢観楼事件と呼ばれるものがあり、彭真が中心になって「三面紅旗」政策への批判を準備したともいわれている。⁽⁸⁾このように見てくると、「翻案風」は彭徳懷を軸にして動いてはいるものの、本質は毛沢東路線、すなわち「三面紅旗」に対する批判がこのような形で現われたと見るべきであり、かつ、その背後にスターリン批判を契機として明確になってきた「ソ連修正主義」が影を落としていることを見逃すことはできない。

毛沢東にとって、「ソ連修正主義」は二つの面から妥協のできない敵となっていたと思われる。一つは、スターリン批判（1956・2）を契機として個人崇拜が否定されたことである。もちろん、このこと自体は修正主義と直接関係はないのであるが、個人崇拜反対の風潮を通じて、反毛沢東路線が勢いを得てきたことは否定できない。それはあたかも教条主義批判を通じて修正主義が現われるのと同じ関係であり、毛沢東は八全大会（1956・9）以後、制度的にも党内の権限をかなり削減されながら、⁽⁹⁾しかもみずからの路線が歪められてゆく傾向と直面しなければならなかったのである。ここに毛沢東の焦慮があったといえなくもない。

「ソ連修正主義」がもたらしたもの、毛沢東がついに妥協することができずにソ連と対決するにいたった問題はなにか？それは1960年より始まった「中ソ論争」で明らかであるが、いくつかある問題点のもっとも重要なものは、「社会主義の時期における階級闘争」という問題である。⁽¹⁰⁾「フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓」⁽¹¹⁾（1964・7）では、「社会主義社会では、生産手段の所有制の社会主義的改造をなし遂げたあとでも、階級矛盾はやはり存在し、階級闘争は決してなくなる。社会主義の全段階を通じて、社会主義と資本主義というこの二つの道の闘争が貫いている」と主張されており、それは「全人民の国家」「全人民の党」を主張するソ連共産党と決定的に対立する。

元来、八全大会ではソ連共産党二十回大会の影響が色濃くあり、それをより強力に推進したのが劉少奇らであった。そして、中ソの対立により毛沢東が独自の路線をとり出したにもかかわらず、劉少奇らのいわゆる実権派が実際上動かなかったということが、毛沢東の不満を呼び、ついには文革の発動となったのであるが、「翻案風」はそうした情勢を抜きにしては

考えることはできない。

結局のところ、さまざまな分野、さまざまな形で現われてきた、「ソ連修正主義」を背景に持った「翻案風」こそ、文革において毛沢東の対決したものであり、それを支持して毛沢東とともに闘争した姚文元は、当然ながらあくまで「翻案風」と対決する反修正主義の立場にあった。そして、文芸活動を始めた頃よりつねに毛沢東路線に忠実で、階級闘争についての原則性を堅持していた彼は、それだけの資格があったといえるのである。この小論でさきに触れた彼の評論は、すべてこの階級闘争についての原則性を堅持する立場から書かれたものであるが、つぎに彼が早くからそうした思想を持っていたことをいくつかの初期の論文に即して検討してみることにする。

2

姚文元が本格的に文芸評論で活躍するのは、胡風批判からであるが、そのとき彼は「マルクス主義か反マルクス主義か？」という一文を書いて胡風に反駁している。²³しかし、彼の文章は胡風の細密な論理の展開に対して、必ずしす精密にいちいち対応したものとはいえない。恐らく、これは二十代なかばを少し過ぎたぐらいの青年時代に書かれたものであり、いささかラフタッチであるのは免れない。それにもかかわらず、彼が問題にしている論点は、後年の彼が問題にするところとほとんど異ならない。すなわち、それは階級的視点をいかに堅持するかということが中心であり、このときからすでに彼はつぎのようなことをいっているのである。

……因此同胡風の理論作闘争就不僅是文芸思想的問題，而且是政治，思想戦線上無産階級和資産階級兩条路線的尖銳的闘争。（傍点は筆者）

胡風は「リアリズムの作家にとっては、世界観は主要な問題ではない」と強調しているが、彼の意図は、ソ連における「ラップ」（ロシア・プロレタリア作家同盟）派の誤りを中国で繰り返さすまいということであったように思われる。²⁴「ラップ」派は作家に対して、第一に労働者階級の（すなわち共産主義の）世界観を持つように要求し、「弁証法的唯物論の創作方法」で創作するように要求したのであるが、たしかにこうした要求が教条主義的に出されると、作家の創作活動にブレーキが掛けられるということは大いにありうる。そこで、胡風は「真実を描け！作家に生活のなかで学

習させよ！もし彼が高度の芸術形式で生活の真実を反映することができるならば、彼はマルクス主義に到達できるであろう」というスターリンの言葉を引用して、⁴⁴ 社会主義リアリズムの作家は必ずしも「まず第一にプロレタリア階級の立場と共産主義的世界観をそなえていなければならない」⁴⁵ ということはないのだ、と主張したのである。もちろん、中国共産党の文芸政策が実際面で教条主義、官僚主義及びセクト主義と完全に無縁であったとはいいきれないであろうし、胡風の指摘したことが正鵠を射ている場合もあったかもしれない。しかしながら、教条主義と修正主義、官僚主義と自由主義といったものの論争は、往々にして盾の裏表のどちらを強調するかということから生じるものであり、判定は非常に難しいのであるが、結局のところ、やはりマルクス主義の原則性から逸脱して党の教条主義、官僚主義及びセクト主義を批判しているのであれば、それはマルクス主義者の意見としては誤りといわざるをえないであろう。胡風の場合にも、この問題があるようで、姚文元はその点を衝いているのである。

マルクス主義の世界観をまず持つべきか否かは、リアリズムの問題と関連して、マルクス主義文学理論のもっとも重要な問題点の一つであろう。この点について、胡風はむしろ「高度の芸術形式で生活の真実を反映」するならば、マルクス主義に「到達」することができる、とするわけであり、生活の真実を追求するなら、それだけでマルクス主義に自然と到達すると見なしているのである。姚文元はそれを批判してつぎのようにいっている。

僅僅是胡風崇拜的「自發性」「忠于芸術」是不能產生和達到馬克思主義的。要掌握馬克思主義，必須改造自己的世界觀，努力學習，在革命鬪爭的實踐的風暴中學習，在理論上學習，才可能在創作過程中「達到」馬克思主義。

胡風は「ラップ」派がマルクス主義の世界観で創作するように要求したことは、結果的には図式的な干からびた作品しかつくり出せなかったとして、「弁証法的唯物論の創作方法」の図式から作家を解放すべきだと主張したわけである。これは一見もっともな主張に見えるし、ある種の作家に対しては当てはまることであろう。もし、マルクス主義の世界観を書物を読むことによって理解したというのであれば、その作家がその「マルクス主義の世界観」で作品をつくり出す場合、干からびた図式的な作品しか書くことはできないに違いない。しかし、毛沢東はそうした教条主義的な「マルクス主義」は、マルクス主義ではなく、マルクス主義にそむくものだ

といているし、またマルクス主義の学習は、弁証法的唯物論と史的唯物論の観点によって世界を観察し、社会を観察し、文学芸術を観察するためであって、文学芸術作品のなかに哲学の講義を書かせるためではない、と述べているのである。¹⁰⁴ すなわち、マルクス主義の世界観は作品のなかでお説教したり、それを振り廻したりすべきものでは決してなく、むしろそれが作家の血肉に溶け込んでいて、そこから現実が観察されるということこそが必要なのであって、知識分子出身の文芸工作者はなんとしても自分の思想感情を労働兵の方向に変化させ、改造させることが必要なのである。したがって、胡風の主張にはマルクス主義の世界観をいかにして身につけるかという問題が欠落しているというべきである。彼は毛沢東が「労働兵大衆のなかに深くはいれ」と述べていることに対しては、ほとんど正確な理解を示していない。彼は教条主義的な「マルクス主義」を批判することによって、革命的な作家は階級的視点を持ち、マルクス主義を学習しなければならないというマルクス主義の文学理論そのものを批判しているのである。姚文元はそのことについて、つぎのごとく指摘している。

因而胡風取消馬克思主義世界觀的理論就具有特別的危害性，它實際上取消了文學的党性原則，提倡作家知識分子不必改造自己的思想。

姚文元はさらにこの問題について、胡風の本質をあげている。胡風は有名なバルザックのリアリズムについて述べたエンゲルスの見解を持ち出して、バルザックが創作の「実践闘争」を通じて、「王党派の政治信念をくつがえした」と説明している。姚文元はそれに対して、それなら胡風のいい分は「創作」がすなわち「改造」ということになり、思想改造の必要を否定している、と批判したのである。¹⁰⁵ そしてまた、つぎのようにもいっている。

巴爾扎克作品中雖然反映了現實，但並沒有推翻他保皇黨的「政治信仰」，他作品中也不可能出現勞働人民的英雄。——然而我們今天的任務是刻劃出社會主義建設和改造中勞働人民中的英雄的典型形象，難道不經過思想改造就正確地創造出來嗎？難道遠離開群眾鬥争用小資產階級的思想感情去「體驗」生活就能够「思想改造」嗎？

明らかに、バルザックには歴史的な限界性がある。彼のリアリズムでは新しい時代における新しい人物、すなわち労働人民の英雄を描き出すことはできない。そこで、姚文元は新旧のリアリズムを混同してはならないと胡風に反論しているのである。毛沢東の「文芸講話」については、文化遺

産の継承に関して反歴史主義的傾向が見られるという主張があるが、しかし、胡風のように新しい歴史段階においてもなお金看板としてバルザックのリアリズムを持ち出してくるのでは、むしろそちらの方が反歴史的というべきであろう。文化継承の問題は単純に解決できるものではないが、少なくとも『文芸講話』で問題にしているのは、ブルジョア思想から脱しきっていない知識分子、文芸工作者が、思想改造しようとせずに「専門家」的に文化遺産を継承することで自己の地位を守ろうとする誤った態度であり、そうした知識分子のあり方は文化大革命にいたってはいよいよ明確に否定されたといえる。そして、われわれは胡風の「創作即改造」論にこれと同質の危険を見ざるをえないのである。胡風は党内にある教条主義、官僚主義、セクト主義を批判するのに、知識分子が大衆のなかにはいって思想改造しなければならないという問題を抜きにして、マルクス主義の世界観を押しつけるのは困るとそのことばかりを強調したのであった。

姚文元はまた胡風の「主観戦闘精神」についても批判を加えているが、その要点は「階級性」の問題であり、これについての議論においても、姚文元はマルクス主義の原則性を強く貫いているのである。要するに、姚文元の胡風に対する見解はつきのごとくである。

由于胡風的理論是披着馬克思主義的外衣，而且甜密的聲音很適合于某些想逃避思想改造厭惡深入實際鬭爭的知識分子，就能俘擄住一小部分人。馬克思主義是戰鬥的科學，只有在堅決地和一切敵對思想鬭爭的當中才能強壯和發展起來。馬克思主義是黨性的科學，只有堅決地和一切反黨的理論和行為作鬭爭中才能敏銳和鋒利起來。為了保衛馬克思主義的純潔性，為了保衛社會主義現實主義的文藝，我們必須徹底肅清胡風反馬克思主義的文藝思想！

3

姚文元は1960年3月に毛沢東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」に関連して一つの論文を発表している。⁴⁴ここでも、彼は毛沢東が「百花齊放，百家争鳴」の方針について語ったときの「階級鬭爭は終わっていない」「全人口のなかであろうと、知識分子のなかであろうと、マルクス主義者は依然として少数である。したがって、マルクス主義は依然として鬭爭のなかで発展しなければならない」という言葉を引用して、文

学芸術の領域のなかに階級闘争が存在し、政治思想、文芸思想、世界観について、プロレタリア階級とブルジョア階級の間に闘争があることを強調している。社会主義の段階にいたっても、ブルジョア文芸思想は一日にして消滅することはないのであり、それはいろいろな形で誤った傾向を生み出すのである。

深受欧州資産階級批判現実主義熏陶的人、假如他不是用馬克思列寧主義觀點批判地認識遺產，而是想用外国資産階級文学作為社会主義文学的典範，那麼，就不但会用資産階級的政治標準來歪曲，反对社会主義文学的思想內容，反对作品中的共產主義理想，反对要求作品中有鮮明的無産階級党性，要求甚麼文学作品只列方程式而不作答案，還會用資産階級的藝術標準來貶低社会主義文学在藝術上的光輝成就，要求用資産階級文学那一套用于批判，揭露，諷刺資本主義社会的表現方法来「提高」社会主義文学的「藝術性」，實際上就是要求向十八，十九世紀倒退。

過去の文化の継承は、それを受け入れる者が余程しっかりした立場に立っていないと、知らぬ間に古いものに腐蝕される。単純な継承はつねに有意義であるとは限らない。過去のすぐれた文化遺産はそれがいかにすぐれたものであろうとも、それが生み出されたときの時代的制約から脱しきることはできないのであり、したがって批判的に継承することが是非とも必要になる。ところが、過去の文化遺産のなかに吸収すべきよき部分があると、その部分を抽象的に取り出してきて、宣揚することが多いのである。¹¹⁴ 姚文元はこの問題についても毛沢東の文芸路線の原則性を堅持しており、周揚が映画「キューリー夫人」やホイットマンの「草の葉」について称讃したのを批判したが、このことについてはさきに述べた通りである。さらに彼は錢谷融批判のときにも、この問題について触れている。ここで少し検討してみよう。

この「徹底的にブルジョア人道主義を批判せよ」と題する論文は、姚文元の作家協会上海分会の大会での発言を整理したものである。¹¹⁵ このなかで、姚文元は錢谷融がブルジョア人道主義を相変わらず堅持していて、プロレタリア人道主義とブルジョア人道主義の境界をあいまいにし、消し去っている、と批判している。錢谷融批判ではこの問題が中心なのである。

さて、姚文元はブルジョア人道主義の歴史をたどり、それが封建教会、封建道德、スコラ哲学等の桎梏からの解放を基礎として、個人の欲望の解放、個人の幸福の追求を中心に行っている、と指摘する。すなわち、錢谷融

はブルジョア人道主義とプロレタリア人道主義とには「相通ずる」ところがあり、ブルジョア人道主義に進歩的な部分があるのは、そのなかに「労働人民に同情」したり、「搾取に反対し、貧窮に同情」したりするといった「労働人民の人道主義」があるからだ、と主張しているのであるが、姚文元はそれを真っ向から批判し、錢谷融の主張はブルジョア階級の世界観とプロレタリア階級の世界観の対立を根本的に抹殺している、という。個人主義的発想から成立したブルジョア人道主義と集団主義を基本とするプロレタリア人道主義とは根本的に異なったものなのである。

姚文元はそのことを説明するためにブルジョア人道主義の歴史を検討し、そして、三つの文芸作品を例に挙げて、具体的にブルジョア人道主義がどんなものであるかを示した。

第一の例はディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』である。錢谷融はディケンズを「偉大な人道主義者」と呼んでいるが、姚文元はこの作品における「同情」がいかなるものかを明らかにして、錢谷融への反駁にしている。

姚文元は、この作品が資本主義の暗黒面、とくに金銭支配下の資本主義社会に生きる人間の醜悪面をあばき出していることは評価している。しかしながら、作者が根本的に資本主義の搾取を否定しているか否かには疑問を提出しているのである。作者はたしかにデイヴィッドの不幸な運命に「同情」はしている。しかし、作者がデイヴィッドのために按配した、生活苦から脱れ出る道は、反抗と革命ではなく、金と名声の方向に向かってはい上がることなのであり、デイヴィッドは金持で慈悲心のある伯母に出会うことによって、はじめて不幸な境遇から脱出することができたのである。姚文元はこれについてつぎのようにいっている。

這是幻想把工人的出路寄托在心腸慈善的有錢人的恩賜上，作者对大衛的同情也就是姑母对大衛的同情，這種「同情」就是希望他能够努力「上進」——在資本主義社会中能够爬到一個中等的，比較穩定的社会地位，不再受工人生活的苦難。這里根本没有想推翻資本主義剝削，而只是反对自己被擠進被剝削者的隊伍，這是在資本主義社会的压迫下破產而仍拚命想往上爬的中，小資產階級的声音，絕不是無產階級的声音。

姚文元はデイヴィッドに変わらぬ愛をそそぐ忠実な女中についても、その愛を「奴僕的愛」と見なして、「プロレタリア人道主義といささかも共通したところはない」と鋭く指摘している。われわれは小説を読む場合、知ら

ず知らずに主人公の立場に立ってその喜怒哀楽に共感し、彼の階級的立場にまで思いたらないことが多いし、こうした女中の愛には無条件によるこびを覚える。そしてまた、作品全体については、資本主義社会の醜悪面をえぐり出して批判しようとする作者の「人道主義」を全面的に受け入れ、その点ばかりを大いに評価して、階級的視点から批判的に読むことはほとんどしない。姚文元はそこを見逃すことなく押えているのである。

つぎに姚文元はゾラに触れている。彼はゾラのなかにも「貧窮に同情する」人道主義があることをまず認めている。ゾラは労働者の悲惨な状態、資本主義の搾取に対する彼らの反抗、等について描写しているが、しかし、彼が「ブルジョア唯心主義から出発して、生物学、遺伝学の観点でもって社会矛盾の階級的分析にとって代えている」と姚文元が指摘する限界を持っていたことは認めなければならないであろう。たしかに、ゾラは『居酒屋』において資本主義社会の腐敗した環境を描き出し、そのために仕事もせず酒に溺れ、男女関係も乱れた下層労働者の悲劇を創造した。だが、これは「階級的搾取の問題を道德問題に帰し、資本主義社会の腐敗をプロレタリア階級の墮落にすりかえているのではないか？」姚文元はそのように指摘するのである。そして、つぎのようにいう。

任何以為工人「敗壞了」的觀點，都是從清高的資本階級知識分子出發對工人的「憐憫」，而用這種憐憫觀點絕對不可能寫出作為歷史主人和具有無產階級道德的工人形象。『小酒店』在政治上也充滿了改良主義色彩，這是用生物學的現象來掩蓋階級對立現象，用生物學觀點代替階級分析的必然結果。

姚文元はさらにロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を取り上げ、作者が上流階級及びブルジョア芸術の腐敗と醜悪さに憎悪をいただいているにもかかわらず、資本主義制度を否定していないことを指摘している。ジャン・クリストフは労働者と反動支配者との間に武装闘争が始まったときには、パリの労働者を暴徒と見なして、身ぶるいし嫌悪するのである。結局、『ジャン・クリストフ』は個人主義世界観から一步も出ていない。姚文元はいう。

資産階級人道主義者克利斯朵夫雖然用個人英雄主義去對抗資本主義，但同時也用個人英雄主義去對抗共產主義和集体主義，他同革命的工人，農民的「思想感情」是深刻地對立的。『約翰・克利斯朵夫』在當時的歷史條件下在揭露資本主義方面起了一定的進步作用，但作品的基本思想却

是個人主義的世界観。

姚文元は以上のごとく三つの典型的作品を取り上げて、「労働人民に同情し」「搾取に反対し、貧窮に同情する」ブルジョア人道主義者の階級的限界性を分析した。すなわち、彼らの眼中においては、労働者は「ブルジョア階級の〈慈悲心〉を受けてはい上がってゆく幸運児」であったり、「絶望の深淵で望みもなくあがきながら、ついには破滅する受難者や哀れな人間」であったり、「理性を失った暴徒や道徳的に墮落した野獣」であったりする、というわけなのである。これは明らかにブルジョア階級、小ブルジョア階級の立場で労働者を眺めているといいうるのであろう。かくして、姚文元は「ブルジョア人道主義にある進歩的な部分は、そこに〈労働人民の人道主義〉があるからだ」とする錢谷融の主張が修正主義的であり、そしてまたプロレタリア人道主義とブルジョア人道主義を混同することは誤りである、と述べているのである。

姚文元は錢谷融が文学作品は主として人間を描くことだ、「人間を描きさえすれば、必ず社会の現実を反映することができる」し、必ず教育作用も持つことができる、と述べたことに対しても、つぎの三点から批判している。

(1)文芸がプロレタリア階級の政治に奉仕するという根本原則を否定し、芸術方法の一つであるところの人間を描くということを創作の目的にしている。

(2)作品の評価において、人物が描けているか否かが主要な規準になっていて、政治規準が第一であるという原則を否定している。

(3)人間を描くことと現実を反映するということを対立させている。発展しつつある現実と離れて孤立的に人間を描くなら、真実の、典型的な、理想的なプロレタリア階級と労働人民の新しい人物を創造することはできない。

姚文元は以上のごとく錢谷融の修正主義的視点を全面的に批判した。胡風批判から錢谷融批判にいたる間にも、彼は劉紹棠を批判し、巴人の「人間性論」を批判しているが、すべての基調は同じである。

以上のごとく、彼は文芸界に往々にして教条主義を批判する形で現われてくる修正主義に対して、つねに「思想が実際より遅れている」と反論し、人民大衆のなかに深くはいつて思想改造しなければならないとする毛沢東の文芸路線を堅持した。すなわち、彼は階級闘争についての原則性を堅持

した。彼のその立場は終始一貫しており、文化大革命の活躍につながっているのである。その意味で、彼が毛沢東の意を体して文革の口火を切ったことも、べつに不思議なことではないであろう。

1973. 9. 13

注

(1) 「新中国文芸論争年表」(『野草』所収)によって姚文元の発表した論文を順次並べてみると、つきのごとくなる。

「注意反動的資産階級的文芸理論」1952・2文芸報

「馬克思主義還是反馬克思主義?——評胡風「關於文芸問題的幾個主要論点」——」1955・3解放日報

「關於詩歌問題的討論」1956・12文芸月報

「教条和原則——与姚雪垠先生討論」1957・1

「論「知音」」1957・2文芸月報

「論詩歌創作中的一種傾向」1957・3文芸月報

「駁蟹存的謬論」1957・7文芸月報

「再談教条和原則——同劉紹棠等同志弁論」1957・8

「定哪一条道路?——批判王若望的反党反社会主義言論」1957・8文芸月報

「社会主義現實主義是無産階級革命時代的新文学——同何直、周勃弁論」1957

・9人民文学

「論陳涌在魯迅研究中的反馬克思主義的修正主義思想」1957・10文芸月報

「文学上的修正主義思想和創作傾向」1957・12

「論「探求者」集团的社会主義綱領」1957・12

「評錢谷融先生的「人道主義」論——和錢谷融等弁論」1958・1

「馮雪峰資産階級文芸路線的思想基礎」1958・2文芸報

「莎菲女士們自由王国」1958・3收穫

「以革命者姿態写的反革命小説——批判丁玲的「在医院中」」1958・3

「艾青的道路」1958・4

「論「來訪者」的思想傾向」1958・8文芸報

「歌頌工人階級共產主義精神的作品——簡評胡万春同志最近的創作」1958・10

文芸月報

「雜談文学中的共產主義思想性」1958・12文芸月報

「魯迅論文学」1959・7收穫

「批判巴人的「人性論」」1960・1文芸報

- 『在闘争中発展』1960・3 上海文学
『徹底批判資産階級人道主義』1960・5 上海文学
『努力反映農村生活中的新事物』1960・11 人民日報
『蘊蔵着無窮潜力的人』1962・9 上海文学
『關於加強文芸批評的戰鬥性』1963・6 文学評論
『略論時代精神問題——与周谷城先生商榷』1963・9 光明日報
『社会主義時代的青春之歌——評「年青的一代」』1963・10 文芸報
『評周谷城先生的矛盾觀』1964・5 光明日報，人民日報
『使社会主義文芸蛻化變質的理論』1964・12 光明日報
『評新編歷史劇「海瑞罷官」』1965・11 文匯報，人民日報，文芸報，收穫
『評「三家村」——「燕山夜話」「三家村札記」的反動本質』1966・6 解放日
報，文匯報，人民日報，光明日報，紅旗，文芸報，人民文学，文学評論
『記念魯迅，革命到底』1966・11 人民日報，光明日報
『評反革命兩面派周揚』1967・1 人民日報，光明日報，紅旗
『「在延安文芸座談会上的講話」是進行無産階級文化大革命的革命綱領』1967
・5 人民日報，紅旗
『評陶鑄的兩本書』1967・9 人民日報，光明日報，紅旗
『工人階級必須領導一切』1968・8 紅旗

姚文元の論文には，なおこの表から漏れたものがある。胡万春の小説に関する評論については，筑文生氏の『胡万春の小説と姚文元』（『吉川博士退休記念中国文学論集』1968所収）に詳しい。その他，雑文の類を入れるとまだまだ増える。かつまた『魯迅——中国文化革命的巨人』1959，『文芸思想論集』1964，『在前進的道路上』1965などの著書，『想起了国歌』1964 と題す雑文集がある。

- (2) 『労働者階級はすべてを指導しなければならない』外文出版社版の「出版社のことば」
- (3) 今村与志雄氏も姚文元の「AでなければBである」という「選言的推論」にいささか疑問を呈している。（『姚文元の馮雪峰批判について』、『魯迅と伝統』1967所収）文革期の姚文元の文章ではその傾向がさらに強い。政治的にはともあれ，文芸評論家の文章としてはこれは危険な傾向といわざるをえない。
- (4) この問題については，『周揚顛倒歴史的一支暗箭——評「魯迅全集」第六卷的一条注釈』1966・7で詳しく論じられているが，増田渉氏の『魯迅未亡人に「周揚問題」を聞く』1967・1（『朝日新聞』，『魯迅の印象』角川書店版所収）が許広平からのききがきであるだけに直接的で興味深い。
- (5) 『「文芸講話」の基本的問題』（『現代中国』46号）
- (6) 伊藤敬一『「文芸講話」の世界』
- (7) 彭德懐は朝鮮戦争のとき中国義勇軍の初代司令官として米軍と戦った。（1954

- 年から副総理兼国防部長。1959年解任。)
- (8) 竹内実「毛沢東と中国共産党」1972参照。
- (9) 八全大会以後、毛沢東は中央書記処主席の地位を失い、それに代わって鄧小平が総書記となった。また、1959年には劉少奇が国家主席に就いている。
- (10) 新島淳良氏は、毛沢東が「社会主義という歴史的段階」を無階級社会の第一段階ではなくてプロレタリア独裁が行なわれている全期間の名称とし、プロレタリア独裁の期間を「相当長期にわたる歴史的段階」としたことに注目している。スターリンの「一国社会主義」理論との差は主としてそこにあるのである。したがって、毛沢東はスターリンと違って、一国で打ち立てることができるのはプロレタリア独裁であって、そこはプロレタリア階級を支配階級とする階級闘争のある社会である、と見なしている。(『毛沢東「最高指示」解説』1970)
- (11) 「人民日報」編集部、「紅旗」編集部の論説、傍題は「ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(九)」
- (12) 「解放日報」1955・3傍題は「評胡風「関于文芸問題的幾個主要論点」」
- (13) 胡風は結局国民党のスパイ、反革命分子として処理されたが、ここではひとまずその問題はおく。
- (14) 「ソ同盟共産党(ボ)第17回代表大会速記録」にある、と胡風はいう。
- (15) この部分は林黙函の言葉。胡風の「意見書」は林黙函と何其芳の批判に対する反論の形で書かれた。
- (16) 「文芸講話」1942。
- (17) この問題については、何其芳の議論の方が興味深い。何其芳は「階級的同情」や「政治的偏見」は世界観の一つの側面であるに過ぎず、社会生活の客観状況を見て取ることに世界観の他の側面が働いている、とする。この意見は創作方法と世界観の関係を考える場合に参考になろう。丸山昇氏「中国における文学論と文芸政策」1972・6(「現代と思想8」)参照。
- (18) 「在闘争中発展」1960・3上海文学
- (19) 哲学界では「抽象的継承説」として現われた。馮友蘭は「中国哲学遺産の継承問題」1956でそのことを述べたが、やがて議論を呼び、修正主義思想として批判された。
- (20) 傍題は「駁銭谷融的修正主義視点」1960・5上海文学